Song of small love

麻原　環紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｏｎｇ　ｏｆ　ｓｍａｌｌ　ｌｏｖｅ

【Ｎコード】
Ｎ６２８０Ｅ

【作者名】
麻原　環紀

【あらすじ】
自分で作曲して歌を歌うのが大好きな凛。でも凛は重い病気を背負っているのだった。そしてある日そんな彼女の元へ１人の少年がやってきた―。

＊1＊ Person around me-凛 side-

伝えたくても　伝えられない

この感情（キモチ）は溢れ出したら

止まらない　だからあたしは

いつもあなたを想うんだ

そしてあたしは口ずさむ

小さな小さな恋の唄を―

春

もう春なのにまだ肌寒い感じの空気が流れている。
まぁ朝だからという事もあるかもしれないな。
そんな事を考えながらあたしは白く、狭い病室にあるベットの上

で寝返りをうった。

今日はそんなに身体はだるくないみたいだな。
いつもは朝、目が覚めると身体がだるくてしょうがないのに。

―ん～、目が覚めてしまったようだ。
もっと寝てたかったのに。

まぁすっきり目が覚めたから良いって言えばいいけど。

ヒマだから自己紹介でもしよう。
あたしの名前は大館凛（おおだてりん）。
歳（とし）は１３歳の中学２年生―のはず。
学校行って無いからよくわかんないけど。
趣味は作曲、歌を歌う事だ。
好きなアーティストは沢山いるけどその中でもＹＵＩが一番好きかな。
それにピアノを弾くのも好きだ。

作曲するにはピアノが必要だ。
でも病院にはピアノがないからお母さんが買ってくれたキーボードで作曲をしている。
早く退院したいなぁ。
そして外で思いっきり歌いたい。
病院で歌ったりもしてるけどやっぱり外で歌いたい。

「～♪あたしはこんなにちっぽけなの　あたしはこんなに泣き虫なの～♪」

今もこうやって口ずさんだりしている。
少し歌っていると急にあたしのベットを覆っていたカーテンが開いた。

「なぁに歌ってんの？」

びっくりしながら声のする方を向くと沙希（さき）が立っていた。
沙希はここの病院の院長の孫だ。
そしてあたしと同い年。
だから毎日こうして沙希が学校に行く前に来てくれたりする。

「前も歌ってたじゃん。もう忘れたの？」

こっちは沙瑛（さえ）。
沙希の双子の妹だ。

「歌ってたっけ？」

「うん。歌ってた」

あたしは答えた。
ほんとに沙希は忘れん坊だ。

「なんて歌だったっけ？」

「Ｉｆ　ｙｏｕ　ａｒｅ」

そう言うと沙希は首を傾げた。

多分この英語の意味が分からないんだろうな。

「あなたがいれば」

「あなたがいれば？」

「うん」

まだ沙希は首を傾げている。

たく、なんで理解できないんだこいつは。

ほんとに同い年か？

「凛ちゃん凛ちゃん。沙希ねぇ、前に返された英語の小テスト２０問中３問しかできなかったんだよ」

「ちょッ―それは言うなっていったじゃん」

へへへっと沙瑛は笑った。

忘れん坊で気勝りな沙希とは違って沙瑛はとてもしっかりしてい

ておだやか。
とても双子とは思えない。
普通姉妹なら喧嘩ぐらいするだろうがこの2人はあまり喧嘩をした事が無い。
というか喧嘩したところを見た事がない。
多分それは沙瑛のこのおだやかな性格のおかげだろう。
あたしには2つ歳が離れたお姉ちゃんと弟がいるけどいつも病院に来ると喧嘩ばっかりだ。
特に弟とは。

「ねぇねぇそれとね、今日新しく入院する子が来るんだよ。そいでその子は同い年で―」

「はいッ！この話はそこまで。その先は後でのお楽しみね。ほら、学校行かなきゃ」

そしてばいばーいと言いながら2人は病室を出て行った。
羨ましいなぁ。
あたしも学校行きたいな。
沙希は勉強以外なら学校は楽しいって言ってるし。

「あたしも2人と一緒に学校行きたいなぁ―」

ちょっと呟いてみる。

あたしは横目で空いている隣のベットを見た。
もしかしてその新しい子ってこの病室に来るのかな？

その子は女子かな？
もしかして男子？
女子だと少し困る。
使えないし。
使えて騙されやすい男子だといいな。

そんな事を考えていると病室の扉が開いた。

「おっ、凛もう起きてたのか」

担当医の浅木（あさぎ）だった。
浅木は結構優しい。
でも騙されにくいからなかなか厄介な奴だ。

「今日は新しい子が来るんだよ。しかもこの病室に」

浅木はとても嬉しそうな顔で言った。
あたしもつられて笑った。

「はい。さっき沙瑛達が言ってました」

あいつら…言うなって言ったのに…と浅木は少し怪訝そうな顔になった。
なんとなくそれが可笑しくて笑ってしまう。

「そいつはおまえよりも病状は軽いが結構厄介な病気を持っている奴だ。仲良くしてやれよ」

「分かってます」

分かってませんよ、ほんとは。
だって使う気満々だし。

女子でもまぁ騙されやすい奴なら使う。
男子だったら絶対に使う。

自分で言うのもなんだが結構顔は可愛いほうだと思う。
ずっと病院育ちだから肌の色は真っ白。
だからちょっと日焼けしてる子が羨ましく思う時もあるけど。

髪はセミロング。
短くも無いし、長くも無いってとこかな。

「午前のうちにこっちに来るってさ。楽しみだな」

「はい」

ある意味でね。
浅木はまた後で検査の時にな、と言って病室を出て行った。
前の方のベットを見るとまだカーテンは閉まっていた。
まだ寝てるんだろうな。

前のベットの人は女性で結構若い。
名前は笹倉ナントカ。
名前は覚えてない。
そんな重い病気ではないらしい。

斜め前のベットの人は男性でお年寄りだ。
あまり喋らない無口な人。
名前は分からない。
家族や親戚が来たとこを見た事がない。
この人は少し重い病気で大変らしい。

全ては浅木の情報だ。

あたしはヒマになったから作曲はまだ寝ている人がいるからできないけど作詞でもして時間をつぶす事にした。

—歩きながら僕は　空を仰いだ
空は雲ひとつ無い　快晴
とても気分がいい　とても気持ちがいい

歩きながら考えた　僕は大丈夫かな
まだ大丈夫かな　まだ僕は行けるのかな
こんな僕でも　この道の先を歩いていけるのかな

先が見えないほど　長い長い道
その先にあるモノは何？
きっとそれはとても　素敵な綺麗なモノ
きっとそれはとても　儚く切ないモノ
でもやっぱりそれは　暖かいモノだろう―

なんか意味が分からない歌詞になってしまった気がする。
でもなんとなくいいかもな。後でこれに曲をつけよう。

結構時間がつぶれたな。
でもやっぱり入院生活はヒマだ。
ヒマすぎる。

前のベットのカーテンが開いた。

「あっ凛ちゃん、おはよ」

「おはよう笹倉さん」

結構笹倉さんとは仲が良い。
たまに作曲したばかりの歌を聴いてもらう時もある。

「また新しい歌、作るの？」

「うん。まだタイトルは決めて無いんだけど」

「できたら聞かせてね。凛ちゃんの曲、大好きだから」

「ありがとう」

こういうこと言ってくれる人は沢山いるが、笹倉さんに言われると結構嬉しい。
ホントに心から言ってくれてるみたいで嬉しいのだ。

あたしはこの曲のタイトルを決める事にした。
まだ検査の時間まで結構あると思うし。

あたしはこの曲で何を中心に書いてんだろうなぁ――。
自分でも分かんないや。
やっぱりこの曲は自分でも理解できてないな。

長い長い道の先にあるモノってほんとはなんなんだろうな。
ん～、これはもしかしたら夢の事でも自分は書いてんだろうか。
なんかそんな気がしてきた。
それに思い出も――かな。
絶対に夢という字と思い出という字は入れよう。

あとは――

「凛ちゃーん！検査の時間だよ」

「はーい」

あたしは急いでノートを閉じて、引き出しに閉まった。
もう検査の時間になったみたいだ。

あぁ早く新しい子来ないかなぁ―。

なんかとても楽しみだ。

＊2＊ Start of small love-凛 side-

検査は結構早く終わった。
今日はとても好調だ。
体温も平熱だったし、血圧も好調。
いつもひっかかる心拍数も大丈夫だった。
他の検査も全て好調だった。

検査が終わり、病室に戻るとなんだか騒がしい。
なんか人が沢山居る。

病室に入ると急にこっちに視線が集まる。
―なんだろ？

「あなたが仁と同い年っていう大館凛ちゃん？」

なんかおばさんっぽい人が話しかけてきた。
てか仁って誰？
あっもしかして、その仁っていう子が新しく来るって言ってた子かな。
そいでこのおばさんが仁っていう人のお母さんか。
仁っていう名前なんだから男子かな。
やったね。

「はい。そうですけど、なんでしょうか？」

あたしはわざと分からないふりをした。
だっていろんな事隅から隅まで聞きたいし。

「あのね、この子―仁が今日からこの病室で入院する事になったの。だからよろしくね」

そう言って隣に座っていた男子―おそらく仁だろう―に頭を下げさせた。
仁はやめろよっと言ってそのお母さんの手を振り払った。
お母さんは全く…と呆れ顔で言った。

まぁ仁はそんなに格好良くもないし、格好良くないわけでもないな。
でもあたしのタイプではない。
これだけは断言できる。

「よろしくお願いします」

あたしはそう言って頭を下げてから自分のベットに戻った。
作曲しようと思ったけどこの人達がいるからできないな。
周りにいる男子達は仁の友達だろうか？
格好良い人いないかなぁ…。

まぁいっか。タイトル決めでもしよう。
なんかあの歌詞からは夢と思い出しか出てこないからなぁ。
やっぱり英語のタイトルにしよう。
沙希にいちいち英語の意味を教えるのは面倒くさいけど。

『Ｄｒｅａｍ　＆ａｍｐ；　ｍｅｍｏｒｉｅｓ』

これがいいな。
決まりッ！このタイトルにしよう。

あとは曲をつけて…。
でもここではできないから嫌だけど病棟と病棟の間にある休憩所で曲をつけよう。
あそこにも人はいるけど知っている人ばかりだからまだマシかな。

そう思いながらあたしはキーボードと歌詞を書いたノートを持って病室を出た。
後ろではまだ男子達が騒がしく、喋っていた。

＊

「あら、凛ちゃんじゃない。今日も作曲するの？」

休憩所につくと、七草さんというおばあさんに話しかけられた。

「はい。ちょっと病室に人が来てるので」
「そう。凛ちゃんの歌って今っぽいけど綺麗だから好きなのよ。できたらすぐにここで歌ってね」
「ありがとうございます」

七草さんも良い人だ。
ほわほわとした雰囲気の人であたしが生まれる前からこの病院に入院している。

他にもいろんな人に話しかけられる。
そして同じような台詞を言う。
5歳の女の子、綾香ちゃんにも話しかけられた。

「凛お姉ちゃんだぁー！ねぇ、今日は歌わないのぉ？」
「今日は歌を作るから、できたら歌ってあげるね」
「ほんと？やったぁっ！」

可愛いな。
こんな子まで病気で入院しなきゃいけないのか。
世界で病気なんてもの無くなってしまえばいいのに。
そうすればあたしだって学校に行けるのに。

まぁ入院しなかったら沙希や沙瑛、そしていろんな人と仲良くなれなかったわけだけど。
でも、せめてもう少し軽い病気だったら…。
あぁもうやめやめっ！
こんなずっとマイナス思考だと曲なんて作れないじゃん。

いろんな人と言葉を交わしながら、空いている席に座った。
えっと…これは少し大人しめの曲って感じかなぁ？
あぁ、でもなんか違うかも。
もう少し明るめの方が…。

そんな事を考えながら作曲していたらいつのまにかあたしの周りには沢山の人が集まっていた。
そしてかなり時間が経った後、曲が出来上がった。
曲が出来上がると、すぐにあたしはキーボードを弾き始め、そして歌い始めた。

「～♪～♪～♪～歩きながら～♪僕は空を仰いだ～♪～」

全部歌い終えると拍手が沸き起こった。
この感じがとても気持ちが良い。
だからもっと沢山の人に聞いてもらいたい。
外で自由に歌いたい。
なんていうのは贅沢かな。

「凛ちゃん、この歌すごくいいわね」

「うん。なんか勇気をもらえるよ」

と、いろんな人が次々と声をかけてくれる。
やっぱり楽しいな。

それからもう1回歌うと、あたしは昼食の時間になったので一旦病室に戻った。
出て行くまでとても騒がしかった病室がいまではしーんとしている。
自分のベットの隣を見ると、仁がいた。

「こんにちはぁ～」

呑気に話しかけてみる。
あっちはチラッとこっちを見た。

「こんちは」

そう言うとすぐに彼は運ばれてきた昼食を食べ始めた。
なんかつれない奴だな。
初対面だからしょうがないか。

あたしもベットに入り、昼食を食べ始める。
隣では仁が黙々と昼食を食べている。

「ねぇ、あんたってさぁなんの病気なの？」
「ちょっとしたぜんそく。あんたは？」

仁はこっちをチラッとも見ずに話す。
あたしの病気は…。
言いたくないな。

「あたしもぜんそく」

あたしがそう言うと仁はそそくさに言った。

「嘘だろ。あんた、俺よりも重い病気だって聞いたし」

誰だよ、こいつに言ったの。
多分こいつの担当医だと思うけど。

てかだったらこいつも多分嘘吐いてるよな。
だってあたしよりも軽い病気だけど厄介な病気だって言ってたし。
ぜんそくなんて厄介でもなんでもないじゃん。
しかもちょっとした、って言ってるし。

「あんたも嘘でしょ？だってあたしだってあんたは厄介な病気だっ

て聞いた」

仁はびっくりしたような顔をして、やっとまともにこっちに顔を向けた。

あ、結構仁ってかっこいいかも。

いや、違う。

今はそんな事を考えている時ではない。

「一応ぜんそくだよ。でも、結構重いぜんそく。ほら、俺は言ったよ。おまえも言えよ」

おまえだと？

ムカつく。

「何おまえって呼んでんの？」

「あんただって、俺の事あんたっつってただろ」

「それとこれとは違う」

「違わねぇ」

「違う」

仁の第一印象、ムカつくうざい奴。

「心臓と肺の動きが鈍い。生まれつきだったけど小さい頃に急に病状が出るようになった」

言い合いの末、あたしが言うと仁は黙った。
そして重い沈黙が続く。
先に口を開いたのは仁だった。

「ごめん」

「何謝ってんの？」

「だって―」

「あたし、同情とかそういうの嫌いだから」

あたしは言い切った。
てか仁はさっきのムカつくうざいキャラの方がまだいいかも。

「おまえとかあんたが嫌なら君の事なんて呼べばいいわけ？」

「凛でも大館でも好きにどうぞ」

「じゃあ、凛」

うわ、男子に名前で呼ばれるなんて初めてだ。
なんかくすぐったい感じかする。

「そ。じゃあ仁、あんたちょっと下に言ってジュース買ってきて」

そうあたしが言うと、仁はあらかさまに嫌な顔をした。

「なんでだよ。お茶があるだろ」

「お茶って嫌いなの。ジュースがいい」

「我慢しろよ」

「さっさと買って来い」

あたしはベットから出て仁の所まで行き、１２０円を渡した。
そしてあたしは思いっきり上から目線で言った。

「下の自販機に、百パーセントのりんごジュースがあるから。缶のやつね。それ買ってきてよ」

それからベットに戻り、昼食を食べる。
隣を見ると仁は１２０円とあたしを交互に見ている。

あたしはさっさと言って来い、と言って病室から追い出した。

出て行く時、仁は何か言ったようだったが聞こえなかった。

そしてあたしは黙々と昼食を食べる事にした。

＊3＊ Ｓｈｅ ｔｈｅ ｎｅｘｔ-凛 ｓｉｄｅ-

「凛～！たっだいまぁ」

大きな声と共に病室の扉が開き、沙希が入ってきた。
今日は帰りが早い。
それに沙瑛はどうしたのだろう。

いつもは帰ってくる時は沙瑛が一緒だし、帰るのは６時近くになるのに今日は４時だ。
部活が無かったのだろうか。

「おかえり。今日は早いみたいだけど」

「そうっ！今日は部活が無かったんだぁ～」

やっぱり。
推理的中。

「何部だっけ？」

「何？もう忘れたの？忘れん坊だなぁ」

「あんたに言われたくないけど」

「陸上部だよ。陸上部」

「へぇ〜」

陸上部かぁ―。

あたしは絶対に入れない部活だな。

あたしは心臓が悪いから走ると危ない。

だから走るのはもっての他、激しい運動は絶対にできない。

でも体力をつけるために屋上に散歩に行ったり、休憩所まで歩いて行ったりはするけど。

「沙瑛は？」

「沙瑛はね、吹奏楽部で今日も部活あるから遅くなるよ」

そういえば沙瑛は吹奏楽部だったっけ。

吹奏楽部ならあたしにも入れそうだなぁ―。

いつか少し病状が残っててもも退院できたら吹奏楽部に入りたいな。

「―誰？」

ずっと黙って隣のベットで本を読んでいた仁が急に話に入ってきた。

何だよ、さっきまで黙って本読んでたくせに。
しかも本を読みながら話しかけてきてるし。
しょうがなくあたしは答えることにした。

「沙希。泉沙希。ここの院長の孫」

「ふーん。よろしく、泉。俺は津島」

「あっそ。津島さん」

沙希は少し不機嫌そうに答えた。
本の方に目を落としながら話してるからかな。
しかも話に入ってきたんだし。

「ねぇ、何あいつ」

沙希は小声で話してきた。
あたしもつられて小声で答える。

「何って？」

「どういう奴？」

「なんか少し重いぜんそくで今日から入院するんだって。この病室で」

「げっ、この病室で？」

「そう」

沙希はものすごく顔をしかめた。
別にあんたの病室じゃないんだから…。

「もうあたしこの病室に毎朝来ないかも…」

「そんなに嫌？あいつ」

「やだ」

あれだけで印象が決まるわけ？
わがままだなぁ、沙希は。
どうにかならないのかこの性格。
こんなあたしが言うのもなんだけど。

とにかく、ただでさえつまらない入院生活の中での楽しみが減ってしまうなんてのはこっちだって嫌だ。
一応あたしは沙希達が毎朝来てくれるのがとても楽しみなんだから。

「ねぇ、沙希ってさぁ陸上部なんでしょ。長距離？短距離？」

「長距離。まぁ短距離も早いけどね」

「ふーん。何秒？」

あぁ、あたしはばかだなぁ。
こんなの聞いたってあたしに早いかどうかなんて分からないのに。
でも、沙希とできれば長く話していたい。
だから聞いても分からない事でもあたしはなんでも聞いてしまう。

「１００ｍは、１４．６７」

「それってすごい？」

「うん、すごい」

「何自分で言ってんの」

ほんと、何自分で自分の事すごいって言ってんだか。
確か沙瑛が前にほとんどの人が１００ｍは１７秒ナントカって言ってたな。
じゃあやっぱり沙希の記録は早いのだろうか。
また今度沙瑛に聞いてみよう。

そういえば今日は沙希は部活が無くて早く帰ってきたんだよね。
だったら学校の友達と遊んだりすればいいのに。
何であたしなんかと話したりしてんだろ。

「沙希って友達と遊んだりしないの？」

あたしが聞くと沙希はもう、と言った。

「凛って、急に話し変えるよね。ま、それが凛らしいっちゃあ凛らしいんだけど」

「そんなのどうでもいいでしょ。で、あたしの質問に答えてよ」

沙希はう～んと考えている。
そんな考えるほどの質問をしたのかな。あたしは。

「凛と話してる方がおもしろいから」

沙希はそう言ってニッと笑った。
ほんとにそうなのかな。
でも沙希がそう言うんだからそうかな。

なんか沙希の笑顔を見てるとこっちまで楽しくなる。
だから沙希とはずっと話してたいと思うのかな。
きっとそうだ。
あたしは何度もこの笑顔に助けられたのだから。

「ありがとね」

なんとなくあたしは沙希に向かってそう口にしていた。
沙希は、はい？と不思議そうな顔をしている。

「何？急に」

「なんでもない」

「何？何？」

「なんでもないってば」

「何ぃ～！」

「なんでもないっ！」

もう、しつこいなぁ。
しょうがないか、それがこいつなんだから。
一応いい奴なんだしね。

そしてあたし達は沙瑛が帰ってくるまでずっと喋っていた。

＊4＊ Her song-仁 side-

入院生活ってなんでこんなに退屈なんだろ…。
なんか凛は顔は可愛いけどかなりわがままで変な奴だし。
泉って奴はなんでか分かんないけど俺の事嫌ってるっぽいし。
その妹は―まぁ、普通だったな。

「この病院には普通の奴はあいつ以外いねぇのかよ―」

おっと、ついつい声に出しちまった。
でもほんとの事だしいっか。
凛に聞こえてない事を祈る…。

ガシャッ

すると大きな音をあげて俺のベッドを包んでいたカーテンが急に開いた。
俺がおそるおそる顔をあげると恐ろしい表情をした凛の姿が。

「誰？あいつって」

ニッコリと笑って凛は言った。
笑っているといっても口だけが笑っていて目があまり笑っていな

い。
やばい。どうする、津島仁。
「当然あたしの事だよね？」
少し声のトーンを下げて凛が言った。
こういう時はこいつの話に合わせよう。
「そうそう。凛の事だよ。ほら、泉姉妹ってちょっと変わってるだろ…？」
おい、やばいよ俺。
友達の事を悪く言われて良く思う奴がいるか？
…いねぇよ、馬鹿。
あぁなんか凛の表情が険しくなってきてる…。
「そんな嘘、このあたしに通用すると思ってたわけ？」
俺、殺されるかも―。
「え、や、その―」

「死ね、クソ」

そう言って俺のベッドをこいつは蹴った。
思ってたよりもその蹴りは強くかなりベッドが揺れ、俺は落ちた。
そして頭を思いっきり床に叩きつけられた。

「いっっっってぇ〜！！」

多分この俺の叫び声は病院内にとてもよく響いただろう。
しばらく俺は床につっぷしていたが、さすがにそれはあまりにも間抜けだと思ったので起き上がる事にした。
それから頭を両手で支えながら凛を見ると―、

「クククッ―」

笑っていた。
なぜ俺はこんな病院に来たのだろう――。

♪

「あぁ〜面白かったぁ」

そう言って凛は伸びをした。

たくっ、のんきなもんだよな。
俺は死ぬかもって思うぐらい頭を強くぶつけたっていうのに。

「ていうか普通、あんなでかい声で叫ばないし」

「それだけ痛かったんだよ」

最悪。最悪だ。
この性悪女。

なんかこいつは病院内で自作の歌とか歌ってて人気者だとか聞いたけど絶対それ、人違いだって。
こいつがそんなみんなが聞きたくなるような歌なんて作れるわけないし。

…って歌？
こいつって歌作ってんだよな？
なんかちょっと聞きたいかも―。
いや、まぁでもそんなすごい歌でもないだろうけど。

「なぁ、おまえ―じゃなくて凛って歌作ってんだろ？」

「はぁ？何、急に。―まぁ作ってるけど？」

「じゃあさ、歌ってよ」

駄目か…？
てかこいつが俺に歌、歌うなんて絶対無いし―。

「いいけど」

「へっ？」

今、こいつなんて言った？
いいっつったか？

「いいのか？」

「別に。そのかわり、あんただけに聞かせるわけじゃないから」

「は？どういう意味？」

「病院の休憩所。そこに行く。ほら、キーボード持って」

そして俺は少し重いキーボードを持たされた。
凛はもう病室の外に出ている。

「早くして。そうしないと夕食の時間になっちゃうじゃん」

「はいはい、分かりました」

俺は犬のようにこいつのあとについていくしかないみたいだ。

♪

「あら、凛ちゃん。今日も歌、歌うの？」

「はい。でもそろそろ夕食の時間なんで、少しだけ」

なんか凛はたくさんの人に話しかけられている。
やっぱりあの人気者だ、っていう話は嘘じゃなかったんだ…。

「あれ、この男の子は？」

「あたしの病室に来た子。仁って言うの」

「初めまして、仁君」

「初めまして」

やっぱり変な病院だよ。
なんでいちいちこんな名前なんて覚えてんだよ。
そんな仲良くしたって意味ないだろ。
同じ病室ならまだ分かるけど…。

「あっ、着いた。ここ、あたしの特等席。ここの席から見る景色が

一番綺麗なんだ」

そう言って凛は窓側に置いてある席に腰掛けた。
確かにここの窓からの景色は綺麗だ。
空がよく見えるし、山もよく見える。

近くにあったテーブルにキーボードを置いた。

「ちょっと、仁。そっちのテーブルよりもこっちのテーブルの方が近いじゃん。ていうかあのテーブル持ってきて」

「はぁ？自分で持って来いよ、それぐらい」

「じゃあ、歌わない。それにあんたの席もこの特等席に座らせてやろうと思ったのに」

「あぁ、もうたくっ、分かったよ。持ってけばいいんでしょ、持ってけば」

ほんとにわがままなお姫様だ。
おっ、こいつにお姫様ってぴったりじゃん。
いや、待てよ。
そしたら俺が家来って感じになっちまうじゃないか。
それはやばい。

俺は結構重いテーブルを凛が座ってる席まで持ってった。
そしてキーボードをそのテーブルの上に置いた。

「どうも。じゃあ、歌う。そこの席、座っていいから」

凛は隣に置いてあった椅子を指差して言った。
俺はその席に座った。
そして凛はキーボードを弾き始めた。

「～♪～♪～♪～～また明日ね～♪そう～言って別れた～♪～♪～
でもあたしには～そんな事は分からない～だって～♪～あたしには
明日があるかなんて～分からないのだから～♪～」

凛は少し大人しい感じの歌を歌い始めた。
彼女が歌い始めるとだんだんと人が集まってくる。
そしていつの間にか周りは患者さんでいっぱいになっていた。

なんか思ってたよりもいい曲だな…。
こいつでもこんな歌が作れるのか。
凛には才能があるのかなぁ―。

「～♪～♪～それは～危ないから～駄目だよ～♪～なんて言われて
も～♪～～もうあたしは～分からない～聞かないよ～～♪～あたし
は自由だから～♪～♪～」

歌がサビに入った。

なんだかこの歌詞は凛の心の中を歌ってるのではないか？
走ったり、激しい運動をするのは心臓、肺が弱いと危ないから駄目だ。
でも彼女は走りたい、みんなと同じ事がしたいのではないか？
初めて聞く彼女の歌は―とても綺麗だった。

＊5＊ By two people-凛 side-

「あぁ～早く夏休み来ないかなぁ～」

沙希は病室に来て早々、伸びをしながらそう言った。
う～ん、夏休みかぁ～。
ていうかまだまだじゃない？

「夏休み始まるのっていつ？」

「7月の21日」

「まだまだじゃん」

もうそんな先の話をしてんのか、沙希は。
でも夏休み始まると沙希達がいっつも病院に居てくれていいんだよねぇ…。
まぁ、仁がいるけど。

「津島は？」

少し怪訝そうな顔をして沙希は隣の空いているベッドを見た。
別にいないんだからそんな怪訝そうな顔しなくてもいいのに。
ま、顔に出やすいタイプだからしょうがないか。

「知らない」

あいつなんて知らないし。
ていうかあのあたしの歌を聞きかせた日からなぜか仁はどこかへ行ってばかりだ。
何か意味分かんない奴。
大体がなんであたしの歌を聴きたがったんだろう。
別に興味を持つような事は言ってないと思うんだけど。

「ふ～ん」

「今日も沙瑛いないの？」

「うん。なんか大会が近いんだって」

「陸上部は？」

「今日は早く終わった」

そう言って沙希はピースサインをしてにかっと笑った。
沙希はちゃんと部活に出ているのだろうか？
ちょっと気になるな。

「ねぇ、あたしって学校行けないのかなぁ～」

「行けるんじゃない？」

はっ？

「行けるのっ！？」

「なんか最近調子よくなってきたから、もうそろそろ学校に行かせてもいいんじゃないかって、じぃが言ってたよ」

「院長が？」

「うん」

ほんとかなぁ。
学校行きたいな。
部活はだめかもしれないけど。

「あっ、やっぱ～い。テスト勉強しなきゃ」

「テスト勉強？」

「うん、あと2週間後ぐらいに中間テストがあるんだ」

「ふ～ん、大変だねぇ」

「凛はいいなぁ。テストなくて」
「でもつまんないよ、それも」

沙希はじゃあね、と言って病室を後にした。
その入れ替わりに仁が入ってきた。
よくよく見ると手に何か持っている。
それは、ギターだった。
青色の普通の大きさの奴。

「どうしたん？そのギター」

話しかけてみた。
すると仁は少しびっくりしたような顔でこっちを見た。

「あぁ―」

そう言うと仁は自分のベッドの上にそれを置いた。
答えろよ。

「どうした、そのギター」

あたしはまた聞いてみた。

仁はこっちをちらっと見るとギターに視線を落とした。

「俺のだよ。入院する前から持ってたんだ」

「なんで今頃持ってくんの？」

「おまえの歌」

仁はそう言って黙った。

「あたしの歌がどうした？」

少し目を泳がせて俯いてから仁は言った。

「おまえの歌、弾いてみたかったんだよ」

「へっ？」

「だから―おまえの歌、好きだから―」

そう言って仁は初めて聞かせた歌をギターで弾き始めた。

―すごい。

音もリズムも全て合っていた。

２回しか聞かせた事はなかったのに…。

すべて耳コピーしていたみたいだ。
でもやっぱり全部は覚えられなかったのか、少し違う部分もあった。
しかしそれもちゃんと綺麗な音になっている。
音は外れていない。
全部弾き終えると仁は言った。

「—どうだ？」

「うん—」

あたしは少し戸惑った。
なんて言えばいいのか分からない。

「すごい—。よく覚えられたね」

「おう。1度聞いたら忘れられなくってな。でもかなり練習したよ」

あぁ—だから最近姿を見せなかったのか。
急にこいついいとこみせやがって。

「ばーか」

あたしが言うと仁は少し眉に皺を寄せた。

「ばかとはなんだよ。せっかく人ががんばって―」

「別に頼んでないもん」

「―なぁ」

「何？」

あたしは少し不機嫌そうに答えた。

「2人で歌わないか？」

「はぁ？」

「俺、おまえの歌に一目惚れした」

何を言い出すんだ、この男は。
でも、いいかもな―。
こいつ結構腕いいみたいだし。
2人でやるのもいいもんかもな。

「ま、いんじゃない？」

あたしは一応そう答えておいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6280e/

Song of small love

2010年10月9日14時17分発行